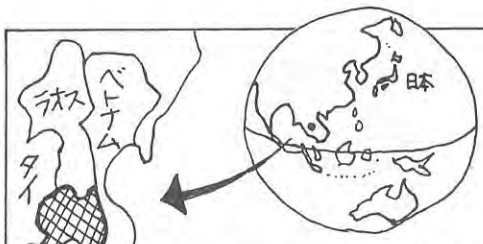
おかげさん

別冊

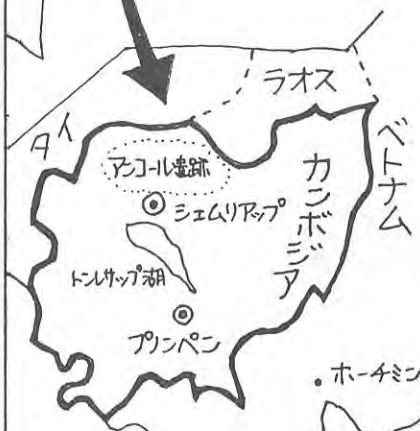
真宗大谷派
高徳寺通信

東埔寨見聞録

旅のルート



Kingdom of Cambodia
(プノンペン)



『2008年秋、私はカンボジアへ行ってきました。参加者は全員真宗大谷派のお坊さんで、「アジャセの会」のメンバー13名。カンボジアといえば、アンコール・ワットが有名ですが、私には漠然としたイメージしかなく、どんな国なのかも分かりませんでした。また世界遺産となっている遺跡群はいつ崩壊してもおかしくない状況なので、思いきって巨大石造寺院へ参拝してきました。5日間という短い日程でしたが、カンボジア王国のこと(歴史、文化、風土etc.)を、見聞してきたまんま、お伝えしたいと思います。どうぞお気楽な心もちでお読みください。』

カンボジアの諸情報

KINGDOM OF CAMBODIA

KINGDOM OF CAMBODIA

『カンボジア王国』（正式名称）
〔立憲君主制〕

※ カンボジアでは自国を「カンプチャ」と呼んでいる。建国者といわれているインドのバラモン僧「カンプー」と、その祖を意味する「チャ」に由来するそうだ。

【首都：プノンペン】

面積 約18万平方キロメートル（日本の約半分）

位置 インドシナ半島にありベトナム・タイ・ラオスに接している東南アジアの国家。

人口 約1400万人。

時差 2時間。日本より2時間遅い。

所要時間 今回成田空港からベトナム航空でプノンペン空港まで9時間40分かかった。（ベトナム経由）

通貨 通貨単位はリエル。私が行った時は1ドルは約4000リエルだった。観光客の行く所はUSドルが使えるので、ドルを持っていれば安心だ。

気候 高温多湿な熱帯モンスーン気候で、雨季（5月下旬～10月下旬）と乾季（11月上旬～5月中旬）に分かれる。年間平均気温は28℃。11～1月がベストシーズン。

人種・言語 クメール人・クメール語。（＝カンボジア）90%以上がクメール人。

宗教 仏教（南伝上座部仏教"大乗"）が95%。

国旗 中央にはアンコールワット。色は白で仏教を象徴している。上下は青色で王室を表わし、中央の赤色は国民を表わしている。制定は'93年。（上の図参照）

1000リエル札には「アンコールトム」が…。
500リエル札は「アンコールワット」！

1日目／9/29(月)

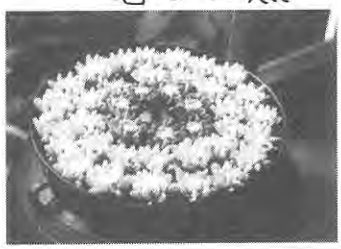
日本 ⬇ ベトナム（ホーチミン）経由 ⬇ プノンペン

雨の成田空港を午前10時20分に発ち、我々の乗ったベトナム航空951便は一路ホーチミンにあるタンソンニャット国際空港を目指す。約6時間半後に到着する。空港内で約2時間、思い思いに過ごす。私はレストランで〝フォー・ガー〟（鳥肉のフォー＝米粉の麺類）とタイガービールを味わう。以前この空港を利用した時には、学校の体育館のような印象を受けたが、今はとても綺麗だ!! ベトナム時間の17時過ぎプロペラ機（80席くらい）は離陸しプノンペンへ向かう。せまい機内は蒸し暑く、途中気流が悪いのか、とても揺れた…。それでも無事にプノンペン国際空港へ着陸したのでホッとする。時刻は18時くらい。入国手続きを済ませ迎えのバスに乗り込む。外は雨。蒸すがさほど暑くない。（27℃）ここプノンペンでお世話してくれるガイドは「ビセット」という名の青年で日本語が上手い。車窓から見る街は全体的に暗い。日本と比べると信号はほとんどないに等しい。大きな舗装道路には〝ロシア通り〟という名がついていた。（ロシアの支援で作られたから）他にもいろいろな国が援助しているのだそうだ。現在ガソリン代は1ℓが1ドル60セントだそうで、日本と変わらないので驚く。

ホテル『カンボジアーナ』

途中信号が停電で灯いてない交差点があったが、それぞれが相手を尊重しながらうまくやっていた。電力が足りなくてよく停電になるらしい。（ホテル等は自家発電の設備があるので問題はないらしいが…）プノンペンの一ヶ月の平均月収はサラリーマンで200ドル。（公務員は100ドル）街の中心地の家賃は500ドルくらいするそうだ。貧富の格差は広がっているんだろうなぁ…。19時過ぎに、『カンボジアーナ』ホテルに到着。大型で鉄筋造りだ。さっとシャワーを浴びて皆で夕食を取る。米粉の麺やチャーハンそして、バイキング形式。〝アンコール・ビール〟で乾杯し、部屋に戻って眠りにつく。一日移動で疲れたな?…。

部屋の窓からは建設中のビルが見える。



水に浮かんだ花がお出迎え…。

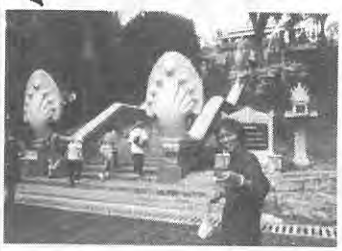
※「プノンペン」とはクメール語で、「ペン夫人の丘」という意味だそうです！

2日目 9/30(火)

ワットプノン（寺院）
↓
国立博物館
↓
王宮前

パコーン、パコーンという音で目が覚めた。6時すぎだ。カーテンを開け下方を見ると、宿泊客がテニスをしていた。雨は上がっており、雲は多いが晴れている。レストランに移動して朝食をいただく。アジアンヌードルとオムレツ＋フルーツ。どれも美味しい。ポットにホットコーヒーを詰め仕度する。ホテルの周りを散歩した後、丈が2センチ位の小さな真鍮製の仏像を購入。バスに乗り込み9時に出発。〝丘の上にある寺〟という意味の『ワットプノン』へ向かう。

ワットプノンのストゥーパ



通りから階段を登ると本堂がある

14世紀の末、この地の豪族ペン氏の夫人は、メコン川に流れ着いた朽木の中から一体の仏像を発見し、すぐに小高い丘の上に仏像を安置するためのお堂を建てた。それがこのワットプノンである。本堂中央には大きな金色のお釈迦さまが安置され、壁面にはお釈迦さまの一生が描かれている。参詣が絶えない。本堂。裏手には27mの高さの王様の墓（15世紀）がそびえ立っている。緑と花々が綺麗なお寺である。

続いて『国立博物館』を見学。

クメール様式の赤い建物で1920年に開設された。クメール美術の代表的な品々が所狭しと並んでいる。入口すぐにはシヴァ神の乗りもの（頭が人間で鳥の胴体）や、巨大なヴィシュヌ神の上半身（それ以外は見つからず、全身があったら6mくらいにはなる）が横たわっている。館内にはヴィシュヌ神、シヴァ神、ブラフマー神といったヒンズー教の神々が多く展示されている。ちなみにシヴァ神の持つホラ貝は水、こん棒は威厳、手のひらは地球を表わし、いつもはつぶっている3の目が開くと前にあるものすべてが焼きつくされるそうだ…。カンボジアの寺院等の屋根によく見られる～～こんな形のものは、『竜』を表わしているそうで、竜は伝説では天国の守り神なのだそうだ。残念ながら撮影が禁止されているので館内の写真は無し。クメール美術を堪能した後、王宮へ向かう。王宮は1918年に建てられたそうで、王様（シアヌークの息子58才）は西奥に住んでいる。（父のシアヌークは北京に居る）ちなみに王様の一ヶ月の経費は100万ドル！だそうだ…。王宮のすぐそばにトンレサップ川が流れている。泥色をしている。今は雨季にあたるのでメコン川の方が水位は高い。11月からは減水期となり、この川でボート競争が行なわれ王様は川岸の屋根のある建物から観戦するそうだ。王様って優雅だなァ…。

2日目 9/30(火)

独立記念塔 ↓
昼食 ↓
トゥール・スレーン虐殺博物館

バスで移動中、広場の中央に大きな塔が見えてきた。『独立記念塔』である。1953年に独立し、その3年後に建てられた。デザインされている「蓮」は仏教を表わしギザギザの「竜」は勝利の意味もあるそうだ。4方向それぞれ、守護神があって、東は太陽、西は雨、南は閻魔大王、北は財産なのだそうだ。独立記念日には、戦死者の魂を慰めるために王様が火を灯すそうだ。11時半頃、レストランに到着。この辺にしてはかなり高級である。(というか、青山あたりにありてもおかしくないような店だ…。)昼食をいただいていると、お金持ちそうな家族づれが来店し、水槽で泳いでる口ブスターを注文してるので驚く。なんとレンジローバー(高級四輪駆動車)で乗りつけておるではないか!!カンボジアの貧富の差はどれ程あるのだろうか…。

ゆっくりと昼食&休憩を取った一行は『トゥールスレーン虐殺博物館』を訪れた。ここは高校を転用して作られ、S-21と呼ばれた。(S-21は殺害、21はカンボジア21州の数)1975年4月に誕生したポルポト政権は、都会人を農村に強制的に移住させ、社会主義改革を強引に進めた。その過程で反革命分子(知識のある者等)と見なされた人々は捕えられ、激しい拷問の果てに虐殺されたそうだ…。敷地内にはクメールルージュが撤退間際に殺害した14名の収容者の墓がある。

独房や尋問室、拷問に使われた器具が当時のまま展示されている。

2年9ヶ月の間に14000人ら20000人が収容されたと言われ、そのうち生還できたのは8名のみだったそうだ。革命が成功したのに飢餓が進むのは誰も反革命分子がいるから違いないという、ポルポトを初めとする党中央の被害妄想に現場の看守は残虐行為で応えた。収容者は「私はアメリカ帝国主義の手先でした」「私はベトナムのスパイでした」と言わされ、処刑されて行った。看守には10代の少年少女がなる事が多かったが、S-21の秘密を守るため後に収容され処刑されたそうだ。罪のない人々が殺害されていく点においては、ナチスドイツの強制収容所とも似ている…。約1000名の収容者の写真が展示されていたが、なんともいえないやるせなさがこみ上げてくる。彼らの遺体は裏手の小学校跡に埋められたが、じきにそこも満杯になり、1977年には処刑・埋葬場がプノンペン南西15kmのチュンエク村に

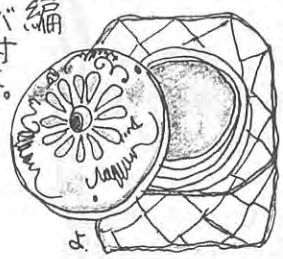
2日目 / 9/30(火)

キリング・フィールド ↓
プノンペン国際空港 ↓
シェムリアップ空港 ↓
ソカ・アンコールホテル

刹された。後にそこは『キリング・フィールド』と呼ばれたが、クメール・ルージュが撤退するまで誰にも気づかれなかったという……。14時半、トゥール・スレーンを後にして、『キリングフィールド』へ向かう。30分程で到着する。到着直前に物凄い雨となる！バスから降りたくなくなる程だ。水たまりと化した泥々の地面を進むと白い建物がある。色々と説明が書かれている。急なスコールに小さな建物は雨やどりの観光客で芋を洗うようである。風雨強まる中、歩いてみる。あちらこちらに大きな穴が掘られていて、小さい白いものが所々に見える。よく見ると人間の骨のかけらであることが分かった…。このあたりでは約2万人もの人が殺害され埋められたそうだ。(カンボジア全体ではポルポト政権下で100万人が殺されたといわれている)農村から生まれた軍隊は都市部の人々に憎しみを持った。そのコンプレックスが根っこにあるのだろうか…。一人ひとりがかけがえのない「いのち」を生きているのになぜ虐殺という形で人生を終えていかねばならないのか!!無数に口を開けている穴を見ていると胸が潰れそうになる。傘など役に立たない程の風雨の中、バスに戻る。

『キリング・フィールド』
1984年 イギリス 映画
70年代のカンボジアで起った内乱を背景に米国人記者と、カンボジア人助手の友情描く。

朝ポットに入れておいたコーヒーがまだ熱くて、ズブ濡れで冷えた身体には、有り難い。皆で回し飲みする…。途中寄った土産店でアンコールワットの絵が描かれたTシャツを少し値切って購入。その場で着がえて、昼になる。16時45分プノンペン国際空港に到着。まだズボンは乾いていない…。離陸まで2時間あるので土産ものを見たりして(といっても売店は小さい)なんと4時間をつぶす。赤絵のかわいい焼物に入ったタイガーバーム(ぬり薬)のようなものを購入する。ベトナムのバッチャン焼のような器に入っていて、何かの木の皮で編んだケースが付く。



【タイガーバーム】

小型のプロペラ機で約1時間、弱、シェムリアップ空港に到着する。19時半だ。飛行機から降りてすぐ機長に手を振ると、笑顔で手を振ってくれた。出口にはガイドのホーさんが迎えに来てくれていた。「ソカ・アンコール・リゾート」というホテルへ向かう。大きくてきれいなホテルである。レストランで夕食をいただく。皆でいろいろな話をして一杯やる。

♦ シェムリアップ＝ Siem Reap（「タイを追い出した」という意味）

3日目／10/1(水)

シェムリアップ『アンコール・トム』参拝

目覚めると晴天で、小鳥のさえずりが心地よい。やっぱり今日も「フォー」を中心にお腹を満たす。遺跡には専用のパスポート（顔写真入りの）を持っていないと入れないので、ロビーのカウンターで一人ずつ作ってもらう。バスで向かう。9時20分、アンコール・トムに到着。少し手前でバスを降りて南大門まで歩く。営業用のゾウがいたり、色とりどりの果物が並んだ露店があったりと、参道はのどかな雰囲気である。門の手前の陸橋の右側に54の阿修羅（アシュラ）、左側に54の神々が大蛇を抱えている。（乳海撹拌（にゅうかいかくはん））城門の上部には大きな観音さまの顔が出迎えてくれる。城壁は一片が3kmの正方形で

アンコール・ワット

ヴィシュヌ神を祀るバラモン教の寺院
『寺院のある都市（町）』という意味。

アンコール・トム

観世音菩薩が安置されている大乗仏教の寺院。『大きな都市（町）』『都城』

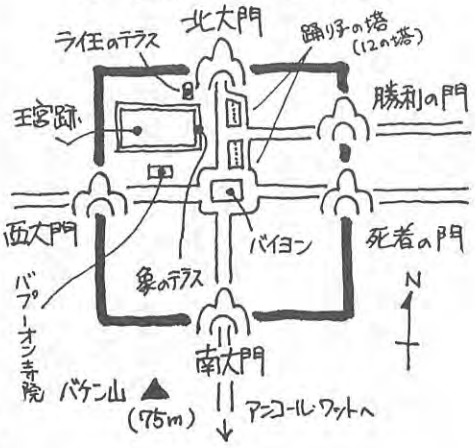
代表的な王様たち…

- ジャヤヴァルマン2世（802～854年）
  - プノンクレーン山でバラモンによる祭儀を行ない王に即位しアンコール王国が始まる。
- スールヤヴァルマン2世（18代目の王）
  - アンコールワットを建立。クメール文化の絶頂。
- ジャヤヴァルマン7世
  - 1181年チャンパ（ベトナム）との戦争に勝利して即位。チャンパ軍の王着占領・略奪からアンコール地域を解放し、新しく再建された都市がアンコール・トム。その中心寺院バイヨン等も建立。アンコールを復興した。ものの本に「王は民の痛みを我が事のように心を痛めた…」とある。

【アンコール遺跡とは…】

- 西暦802年から1432年まで続いたアンコール王国時代にトンレサップ湖の北方地方に築かれた寺院や王宮などの遺跡群をいう。
- 「アンコール」とは「都市」を意味するサンスクリット語の「ナガラ」がクメール語化した名称。
- 1000年頃は人口約21万人で世界第4位。（5位は日本の京都で約16万人）12世紀（最盛期）には50～60万人に増えたと考えられる。
- 1860年に仏のアンリ・ムオによって発見されたと言われているが、それより前、16世紀に中国の周達観がアンコールワットに1年滞在して「真臘風土紀（しんろうふうどき）」という紀行文を残している…。
- 17世紀には肥後（九州）の森本右近太夫一房が（1632年）アンコール・ワットへ参詣している。鎖国令が出される前に交易船でカンボジアへ渡った日本人がおり「ピニャール」という所には日本人町があって400人近くが住んでいたらしい。ちなみにこの森本さんはアンコール・ワットを「祇園精舎」だと思っていたようだ…。
- 仏のアンドレ・マルローがバンテアイスレイの「デヴァター」の彫像の美しさに惹かれ盗み出そうとしたことは有名なエピソードだ。
- アンコール遺跡は、'92年に「世界遺産」に登録された。

≪ アンコール・トムの図 ≫



門は右の図のように5ヶ所ある。54というのは昔の都道府県の数であり、左右を合わせると108つで煩悩の数となるのだそうだ。30年前の内戦でポルポトが像の首などを切って売りとばしたり、壊したりしたので、顔や体が欠けていたりするものが多い。

ナーガ(蛇神)を綱引きのように引き合う神々(左側)の先に南大門が見える。門の上の四面仏は迫力がある。180度ぐるり見渡す。なんだか不思議な空間である…。象を通すために ←こんなたて長になっているんです!

高さ8m、幅3mの城壁は、ヒマラヤを表わし、そのまわりの環濠は大洋(海)を表わしている。ポツッポツッと雨がおちてきた…。次に「バイヨン寺院」へ移動する。この寺は、神々が住む聖域とされるメール山、(須弥山)を模したもので、世界の中心という意味をこめて建造(?)された。バイヨンを建立したジャヤヴァルマン7世という王様は大乗仏教の熱心な信者だったそうだ。高さ42mの中央本殿を取り囲むように16の尖塔が林立し、それらの頂部には「クメールの微笑み」と呼ばれる優しく表情豊かな観世音菩薩の巨大な顔が刻まれている。長い回廊の壁には当時の貴族や庶民の生活の様子が刻まれているが、軍隊の行進やら亀に尻を噛まれる男やら、祈る人々等、見ていて飽きない。

◆ $1払って、ハイポーズ!!

◆ バイヨン寺院

亀に尻を噛まれる男

祈る人

石が積まれただけなので、地震がきたら崩れるそうだ…。13世紀に仏教からヒンズー教にかわったので(支配者の信仰が)、仏像が壊されたり、埋められたりした。使用されている石は"砂岩"で、40km離れた山から運んで来たそうだ。(石に穴を開け、木の棒をさして水をかけ膨張して抜けなくなったものを象に引っ張ってこさせたのだそうな…)バイヨンの魅力を味わった一行は南北が350mある"王宮のテラス"へと向かう。東側の壁面に象が彫られていることから、"象のテラス"とも呼ばれている。王様は

◆象の鼻

ここから向い側にあった〝踊り子の塔〟(左右に6つずつあったらしい)の上の綱渡りの踊りを観たり、勝利の門をくぐって凱旋したクメール軍を迎えたりしたのである。そこから北大門の方へ歩くと〝ライ王のテラス〟がある。その昔、王様が密林の中で大蛇と戦い仕留めた際に浴びた返り血によりライ病になってしまった…という伝説のモデルの王様(ジャヤヴァルマンⅦ世)の像(レプリカ)が安置されている。(本物はプノンペンの国立博物館に)1975年に三島由紀夫が「癩王のテラス」という戯曲を執筆している。彼は1965年にここを訪れ、ライ王像の美しさに心を奪われたに違いない…。そろそろ一度ホテルに戻るかというとき、ガイドのホーさんにバプーオン寺院について話を聞いた。この寺は1060年に建立された。その昔シェム(タイ)が攻めてきたときにお妃が子どもたちを隠したのがこの寺なのだそうだ。

象のテラス、ライ王のテラス、踊り子の塔あたりはこの寺の敷地だという。カンボジアにたくさんある仏像であるがはじめはブロンズ、9世紀から砂岩、16世紀になると木像となっていったそうである。バスに乗り込みホテルへ戻る。レストランにて昼食。なんとさばの焼いたのが出てきたぞ~。たくさん来ているんだろうなァ、日本人…。美味しくて、なぜか3日しか経ってないのにホッとしてしまう自分がいた。食後は昼寝でもしようと思っていたが超大型のプールがあるので入ることに……。

◆いくつになっても楽しいんですよねェ~!

プールには外国人家族と我々(数人)しかおらず貸し切り状態。白人の男の子達と飛びこんで遊ぶ。本当は体をやすめる時間なのだがこれもご縁…。身体も気持ちもスッキリした所で、これより『アンコール・ワット』へ向けて出発する。バスに乗り15時頃到着。外に出ると強烈な太陽がお出迎えである。サングラスとタオルは必需品だ。

いよいよ アンコール・ワットへ

◆540mの参道を歩く。まだ5つある塔の3つしか見えない。

このアンコール・ワット(寺院のある都市の意)は12世紀前半にスールヤヴァルマンⅡ世によって30年余りの年月を費やし建立された巨大な石造寺院である。ヒンズー教のヴィシュヌ神に捧げると同時に王様の墳墓としての意味を成す寺なのだそうだ。周囲5.6kmの環濠に囲まれた寺院内部には、参道回廊、中央祠堂などがあり、5基(中央祠堂の上とそれを囲む3回廊の四隅)の

3日目/10/1(水)

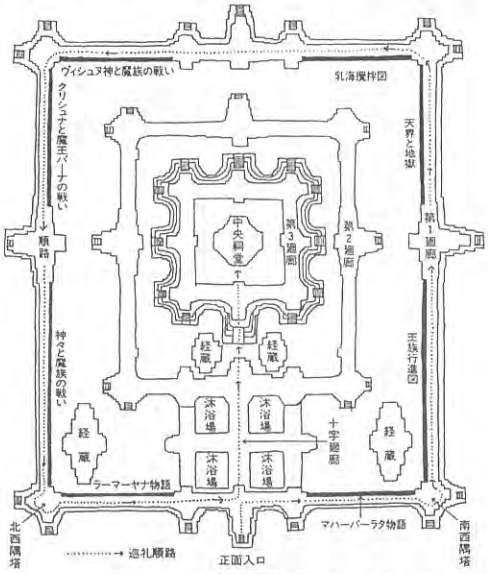
シェムリアップ『アンコール・ワット』参拝

≪西から見た図≫

聖池の前で5つの尖塔と。

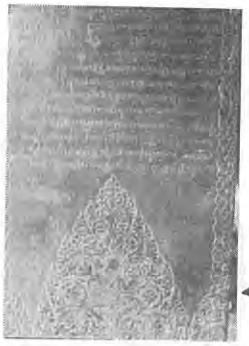
◆西塔門を帽子に合掌…。

北



西 ≪上から見た図≫

◆さっきまで帽子になってた西塔門…。



寺院内の柱の彫刻

尖塔がそびえ立っている。ワット全体の広さは、東京ドーム約15個分。アプローチは西塔門からまっすぐに延びる参道からである。砂岩を敷き詰めた540mの参道には門や段差により、さまざまな視覚的な仕掛けがなされている。昔、東京の千住にあった『おばけ煙突』と似ている。

『東京電力千住火力発電所』
通称・おばけ煙突
・大正15年1月(建設)
・昭和39年2月(廃止)
見る角度によって1本～4本まで見えることからこう呼ばれた。

カンボジアのほとんどの寺院が東び正面なのに対し、アンコール・ワットは西が正面である。ヒンズー教は、インドの民間信仰とバラモン教の融合(インド教)であるが、仏教の要素もあって、西(西方極楽浄土)にこだわりを持ったのであろうか。

春秋の彼岸の中日には、中央祠堂から陽が昇るそうだ…。西から東へ向かって進むので午前中は逆光となる。たいていのツアー客は午後に訪れるので、午後は混雑する。中央祠堂と環濠はアンコール・トムと同様に須弥山と海を象徴している。

ものすごく暑い中を、歩いて進む。この長い参道の整備は諸外国と上智大学が携わっているそうで、たくさんの人々の協力なくしては、ここを歩けないんだなぁ…と感じた。西塔門をくぐるまでは中央祠堂は見えないのだが、うす暗い内部を通り抜けると、まぶしさと同時に3つの塔が姿を現わした。なんとも感動的な演出だ。正面入口ま

※他の4つの尖塔はヒマラヤを表わす。

3日目 10/1(水)

『アンコール・ワット』

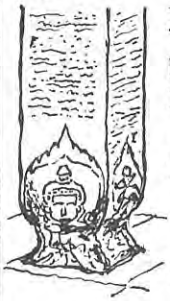
参拝

第一回廊

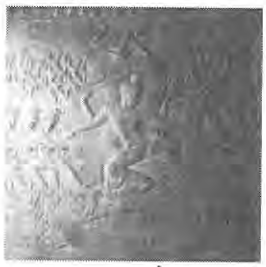
◆聖池に映るワット

◆全周約760mの第一回廊

では、ここからさらに350mほど進まなくてはならない。〝参道〟というからにはすぐにお堂に着いちゃうより、ちょと時間をかけて景色や空気を味わいながら、気持ちの高まりを感じながら進む方が良いなァ…。でも暑すぎるからサッと入れる方が良いかなァ…。などと考えながら参道から左へ逸れて〝聖池〟の方へ進む。この蓮の咲く池のあたりからは5つの尖塔が見える。池にワット全体が映ってとても美しい。左角(北西)から寺院内に入る。石段を数段上がると一番外側の第一回廊となる。右に曲がると左の壁一面にびっしりと絵巻物が浮き彫りで描かれていて、その美しさに言葉を失なう。我々が入ったのは正面ではなかったので、最初に出会ったレリーフは(8つある物語のうちの)『ラーマーヤナ』である。これは、インドの叙事詩で、英雄ラーマ王子が猿の勇士ハヌマーン軍と協力して魔王ラーバナと戦い、誘拐された妻シータを取り戻すというものである。凄いの一言だ。ラーマーヤナを観終わると正面入口の所へ出る。そのまま進むと『マハーバーラタ』のレリーフが見えてくる。これも古代インドの叙事詩で、パーンダヴァ族とカウラヴァ族が王位を巡り戦う物語である。迫力ある戦闘シーンが所狭しと彫られている。角を左に曲がって東に進む。砂岩で出来た柱の根元がやや細っている。石の荷重や雨期に浴びる雨水の影響らしい。早急な補修が望まれる。



南面には『王様行進図』(スールヤヴァルマン2世の行軍のレリーフ)と『天国と地獄』の浮き彫りがある。後者は上段が天国、下段に地獄、中段には閻魔大王の裁定を求める人々が描かれている。特に地獄の段では、ムチ打ち、舌抜き、火責め、針地獄などの刑を受ける人々の様が生々しく描かれていて、こんな所には行きたくないと思ってしまう…。さらに角を曲がると、東の面となる。この面には『乳海攪拌』と『ヴィシュヌ神と魔族の戦い』の2作が描かれている。乳海攪拌のお話はカンボジアの人が大好きなのだそうだ。これはヒンズー教の天地創造の神話で不老不死の薬アムリタ(甘露)を得るためにデーヴァ(善神)たちとアスラ(阿修羅〝悪神〟)たちが大蛇ヴァースキを巻きつけ、大蛇を綱に見たてて綱引きをする。山を回転させ大海をかき回すとやがて大海は乳色の海となる。こうして千年以上かきまわしていると、海中から太陽・月・神妃ラクシュミーなどが次々に生まれ、最後



※大亀の上にヴィシュヌ神、その上には天女アプサラが!

3日目/10/1(水)

『アンコール・ワット』参拝
第二回廊

にアムリタ(甘露)が出てきて、ヴィシュヌ神へ捧げられるというストーリーだ。大蛇で神々が綱引きをするというのが面白いなァ…。この後、北面の『クリシュナと魔王バーナの戦い』と『神々と魔族の戦い』を観て、正面入口から『十字回廊』へと進む。この近くに大きな『ヴィシュヌ神』が立っている。8本の腕を持つ太陽を神格化した神さまで、土着神として土地の人々に信仰されている。ちなみに中央祠堂の下にはヴィシュヌ神と王様が合体したというヴィシュヌ・ラージャ神王像が安置されていたそうである。そして、この回廊には17世紀にここに参詣した日本人(少なくとも4回別々の人が参詣している)の記した墨書(落書き?)が壁や柱に14例も残されている。その中でも森本右近太夫という武士は、仏道修行&父母の菩提(ぼだい)を弔(とむら)うために(?)千里の海を渡ってきたことや、四体の仏像を寄進することなどを柱に書きつけている。そしてアンコール・ワットを「祇園精舎」だと思って手描きでリッパな絵図面まで作っている。このことから当時の日本人がカンボジアを天竺(てんじく)と敬い、仏教を共通基盤とした交流が生まれていたことは、まぎれもない事実であろう。またワットにはクメール王国の滅亡後に、小乗仏教が普及してから持ち込まれた仏像が何体も安置されているそうだ。中央祠堂には仏陀の立像が安置されているそうだ。「そうだ」と書いたのは、我々はそこに行くことが出来なかったからだ。建物(岩・石)の劣化が進んでおり(数ヶ月前は登れたらしいが…)ロープがはられ、立入禁止となったどの尖塔にも登ることは出来なかった。残念である…。

♦温和な性格のヴィシュヌ神

ロープがはられている。崩落の恐れもあるという…。

その他、十字回廊では沐浴場(もくよくじょう)の跡を見たあと、第二回廊をまわり、内側へ出てみる。第三回廊から成る建物と中央祠堂がそびえ立っている。首を空へ向けないと視界に収まらない。回廊の外へ出てみると改めて『連子窓』の存在に気づく。破損している窓が多く見られる。手前の大きな石にも彫刻が施されている。遺跡の壁には浮き彫りで『デヴァター』(女神)が彫られている。同じようでいて一つ一つ皆違う。今日は朝からかなり歩いていると思う。ここら辺りで歩くスピードと思考能力はかなり落ちてきている。それでもバスが待っている所までは歩いて行かねばならず、水分を取ったり、シャッターを切ったりしながらひたすら歩く。寺院の外は芝生とジャングルである。振り返るとその巨大な石造寺院は静かに存在感を誇示しているようで、なんとも素敵なお寺であった。

♦デヴァター群舞像

3日目/10/1(水)

バケン山
『プノン・バケン』

500リエル札（12~3円）ナーガが描かれている。

アンコール・トムの南大門のナーガのデザイン…。

『ナーガ』

寺院の参道の両側や入口付近でよく目にするのが蛇神ナーガの彫刻である。カンボジアの原文化は、本来的に水と大地を崇拝する精霊信仰だった。その中に「水の精霊」（ナーガ）がある。ナーガはコブラを指し、超自然的な力を持つ雨や雲、雹（ひょう）を司る神なのだそうだ。カンボジアの建国神話には、村人と結婚した蛇姫ナーギーのために、ナーガ王が冠水した大地の水を飲み干して畑を創ったという話がある…。やっとのことでバスが停まっている広場にたどり着いた。地元の子どもたちが空になったペットボトルを指さして何か言っている。ガイドに聞くと空のペットボトルを集めてお金に換えるのだという。皆のボトルを少年たちにあげると白い歯を見せて喜んでいる。一本いくらくらいになるのだろうか。時間は16時半を回っている。約一時間半かけてアンコール・ワットを観て回ったことになる。バスに乗り込み『バケン山』へと向かう。サンセット・ポイントとして有名なこの山はここから北西に約1kmの所にある。高さ約76mの小高い山で、アンコール聖三山のひとつ。山頂には『プノン・バケン』という五層構造の台型の寺院がある。9世紀末にヤショヴァルマン1世によって建立されたヒンズー教の寺院である。頂上からはジャングルの中に浮かび上がるアンコール・ワットや巨大な貯水池の西バライなどが一望できる。そして、夕陽を眺めるには絶好のポイントとして毎日多くの観光客が訪れるという。ちなみに、アンコール遺跡を訪れる観光客は年間に100万人を超えるそうだ。遺跡へのダメージは雨水だけではなく、我々観光客にも原因があると思う。遺跡がカンボジアの収入源なのだが、客が来れば来る程崩壊のリスクが高まるという、なんとも皮肉な現状がある。登り口の手前でバスを降りて山頂を目指す。登り口がある広場には沢山の土産物売りが、手に遺跡の写真やキーホルダー等をぶら下げて近寄ってくる。急な坂道を登っていくと約15分で山頂へ到着！と同時に巨大な『プノン・バケン』が目に飛び込んでくる。なんともデカイ！陽が落ちるにはまだ時間があるが、それでも良い場所を確保するために早くから登っている観光客は大勢いる。巨大な遺跡

3日目／10/1(水)

『プノン・バケン』
夕陽眺めるの巻
↓
観劇で感激!!

は、四方(東西南北)に急な階段があってよじ登るようにして登る。一番上は意外に広い。ワットを出てくる時に水分を取ったのだが、もう喉がカラカラだ。御同朋から一口水をもらう。(ここでは水は必携だ)いろいろと散策したり、景色を眺めたりして日沈を待つ。17時40分頃、夕陽が雲に沈んでゆく。(雲が多くて地平線に沈むところは見れなかった…がとても美しい夕陽であった。)この巨大遺跡を下りた所に18時に集合なので急いで下りる。大勢が急な石段を下りるので渋滞が起きる。全員揃ったところで足早に山を下りる。暗い坂道も人でいっぱいである。持っていたライトで足元を照らす。下に着いた頃はまっ暗になっていた。バスに乗り込み水分を補給して一息つく。『アマゾン・アンコール』というレストランへは20分くらいで到着。ここはバイキング形式の大きなレストランで、ディナーショー(『ラーマーヤナ』等の劇や踊りを観せてくれる)専門の店だ。アンコールビールとエスニックな食事が一日の疲れを癒やしてくれる。美しい衣装を身に纏い、踊る姿は、アンコール遺跡の壁から抜け出て来たアプサラ(右の写真)たちと重なり、思わず見とれてしまう。ショーを観終わりバスでホテルに戻る。皆で集まって今日あったこと等々をつまみながら話す。笑いの絶えない宴であった…。

4日目／10/2(木)

ホテル↓
『スラスラン』
↓
……

6時半に起きて散歩しながら食堂へ向かう。今日も良い天気だ。この『ソカ・アンコール・ホテル』ともうすぐお別れである。カンボジアでいただく朝食はここが最後となるので、ゆっくりと味わう。9時に出発。バスで『バンテアイ・スレイ』へ向かう。ホテルから約一時間の道のりである。出発して20分程走ると『スラスラン』という巨大な沐浴池が見えてくる。東西約600m、南北300mの長方形の人工湖で、ジャヤヴァルマン7世が沐浴した聖池なのだそうだ。ここでは豊作や雨乞いの儀式が行なわれた。テラス部分には2頭のライオンと7つのナーガのモチーフがある。池の底には平らな石が敷かれているそうだ。王様は贅沢ですなァ…。さらに少し行くと(代々の)王様専用の火葬場の横を通る。ここら辺りまでは2年前に開催された万博の恩恵を受けていたから立道が舗装されているが、この先はかなりの悪路となる。右手の遠くに山が見える。その近く(シェムリアップから北東へ14kmのプレアダックという村の草原)で一ノ瀬泰造さんの

4日目 / 10/2(木)

一ノ瀬泰造さんのこと …▶『バンテアイ・スレイ』参拝

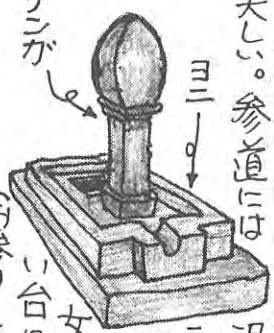
白骨化した遺体が見つかったのだそうだ。彼は'47年(昭和22年)佐賀県に生まれる。戦争カメラマンとして活躍しベトナムを経てカンボジアへ入国。'73年(昭和48年)11月下旬、単身アンコール・ワットへ潜入しそのまま消息を絶った。ガイドのホーさんがポルポトによって殺されたのだと教えてくれた。彼(泰造さん)が日本の両親に宛てた手紙には、「うまく撮れたら持って帰ります。もし、うまく地雷を踏んだらサヨウナラ。」と書かれていたという。カンボジアで何が起こっているのかを命を賭けて伝えてくださったんだなァ…。一ノ瀬さんに心より哀悼の意を表します。合掌。

バスの揺れが激しさを増す…。この近く、タイとカンボジアの国境地帯(カンボジア領内200mのところ)に『プレアビヒア』というヒンズー教寺院の遺跡がある。今、ここをめぐって両国の領有権紛争が再燃しているという。'08年6月にカンボジアが世界遺産登録申請を単独で行ったことがきっかけらしい。

カンボジアの遺跡なのに、タイの軍隊が管理している状態だそうだ。(ちょうど我々が帰国した日に両軍の交戦が伝えられた)

バスの揺れに体が慣れた頃『バンテアイ・スレイ』に到着した。時刻は10時である。アンコール・ワットの北東40kmに位置する「女の砦」という意味のヒンズー教の小寺院は、967年に建立された。ラージェンドラヴァルマン2世の時代に建設が開始され、次のジャヤヴァルマン5世の時代に完成した。三つの神殿は、それぞれ、ブラーフマン、シヴァ、ヴィシュヌの三つの神を表わしている。中央神殿の祠堂に刻まれた「デヴァター」(女神像)の彫像は世界屈指の美術作品として知られ『東洋のモナリザ』とも評されている。'23年、仏の作家アンドレ・マルローがデヴァターのあまりの美しさに惹かれ、寺院壁面から剝がして国外へ持ち出そうとプノンペンまで行ったところで拘束された。'30年に出版されたマルローの小説『王道』は、この事件をテーマにしたもので、盗掘の実態が生々しく書かれているそうだ。この寺院の建物(経蔵や楼門など)の彫刻はとても細かく美しい。参道には沢山のリンガがある。シヴァ神を象徴するリンガは男性器を表し、ヨニという女性器を表す四角い台に乗せられている。

作家アンドレ・マルローを魅了した女神像…。



(お参りしたときはばずされていた)リンガの上からかけた水はヨニから流れ出て聖水になると言われている。寺院内は人でごったがえしている。屋台のお土産屋でTシャツ2枚買ってバスに乗り込む。11時に出発。すぐに雨が降ってきた。

近くの『地雷博物館』に寄る。今なお数えきれない数の地雷が埋められているこの国では、人々の生活の中に底知れぬ恐怖を感じざるを得ない。いろいろなタイプ

4日目／10/2(木)

『地雷博物館』↓
『ワット・タマイ』参拝
↓トンレサップ湖

『コマツ対人地雷除去機'D85MS』
（378円）

の地雷（本物）が展示されている。中でも、小型の対人地雷はプラスティック（中国製）製で探知機でも分からないという。都市部以外に暮らす人々が安心して生活できる日は来るのだろうか？この辺では、アキラという名の40代の男性（元ポルポト派でこの地に逃げてきた）が主となって、自分たちが埋めた地雷を撤去するボランティア活動をしている。ちなみにこれをお読みの皆さんへお知らせです。トミカのミニカーなんですが、購入すると一台につき約10円（コマツとタカラトミーの両社が各5円を負担）がNPO法人『日本地雷処理を支援する会』に寄付されます。お子様やお孫さん、ご自分用（？）に是非買っていただきたいと思います…。カンボジア内戦の傷跡を見聞して、博物館を後にする。

30分程バスで移動すると、「ワット・タマイ」（新しい寺という意味）に到着。この寺はここ20～30年の間に建立されたそうで、この辺で亡くなられた人々のお骨を集めて安置されている。ポルポトを倒したフンセン政権の正統性をアピールしているような印象…。遺骨をガラス越しに見せ物にしている。人間はどこまでも自己中心的な存在であることを頭骸骨が声なき声で語りかけているようである。お昼をいただくためレストランへ寄る。鳥の焼いたものやフォーが出てくるが、パクチーを所望しても無いという。となりのベトナムにはあるのになぜなのだろうか？不思議＆残念。

カンボジアでの最後の昼食をいただいた後は、東南アジア最大の湖、『トンレサップ湖』へ向かう。赤茶色のハイウェイ（一応）を走る。ハイウェイとは名ばかりで、かなり揺れる。シェムリアップから南に約10kmのこの湖は、乾季には面積は約3万ヘクタールだが、雨季になると35倍に広がり、水位も1mだったものが14mくらいになる。これは、メコン川の水が逆流してくるからである。湖の中にはいくつもの水上家屋が並び、人々はここで生活しながら漁業を営む。バスの左右には湖が見えてきた。ポンポン舟が停っているボートに向かう。舟に乗り込んで海のように広大な湖のとば口まで行ってみる。沢山の家が点在し、学校やガソリンスタンド、病院までもが浮かんでいる。それにしてもデカイ。泥の色をした、"海"である。浮いているお土産屋へ寄って戻る。バスに乗りオールド・マーケットという商店が集ってできた町へ寄る。各自思い思いに散策する。途中どこかのホテルの中のレストランで夕食をいただきシェムリアップ空港へ向かう。あたりは暗くなっており、遠くの空が真っ赤に染まっている。ぼんやりと窓の外を見ながら、バスの揺れを味わう。空港でガイドのホーさんに別れを告げて、ベトナムのホー

5日目／10/3(金)

ベトナム・タンソンニャット空港 ↓ 日本・成田空港

チミン経由で帰国の途に。0時15分ベトナム航空90便は、成田を目指し離陸した。

途中かなり揺れた。ほとんどの時間、寝ていたが、目が覚めると窓の外には富士山がはっきりと見えて、帰って来たことを実感した…。日本時間の7時50分無事に着陸。我々のカンボジアの旅は"幕"となったのである。

表紙の絵にさせてもらった"クメールの微笑み"といわれているバイヨンの観世音菩薩…。

『バンテアイ・スレイ』の彫刻

ワットプノンにて…。
お線香の煙が絶えない。

『プノンペン』に由来する朽木の中から仏像を発見するシーンのレリーフ。

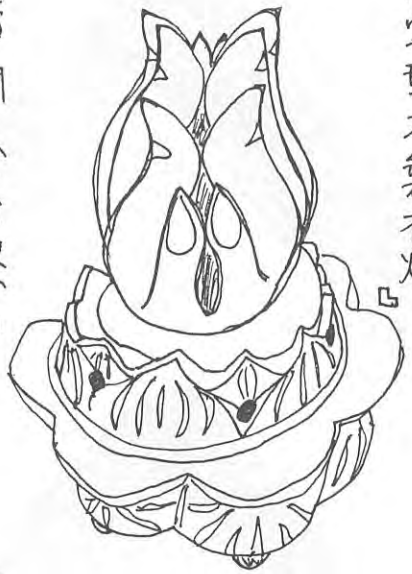
アンコール・トムの"ガルーダ"

王様が住んでいる宮殿の前でパチリ！

omake!

お土産
いろいろ…。

『合掌型木製香炉』

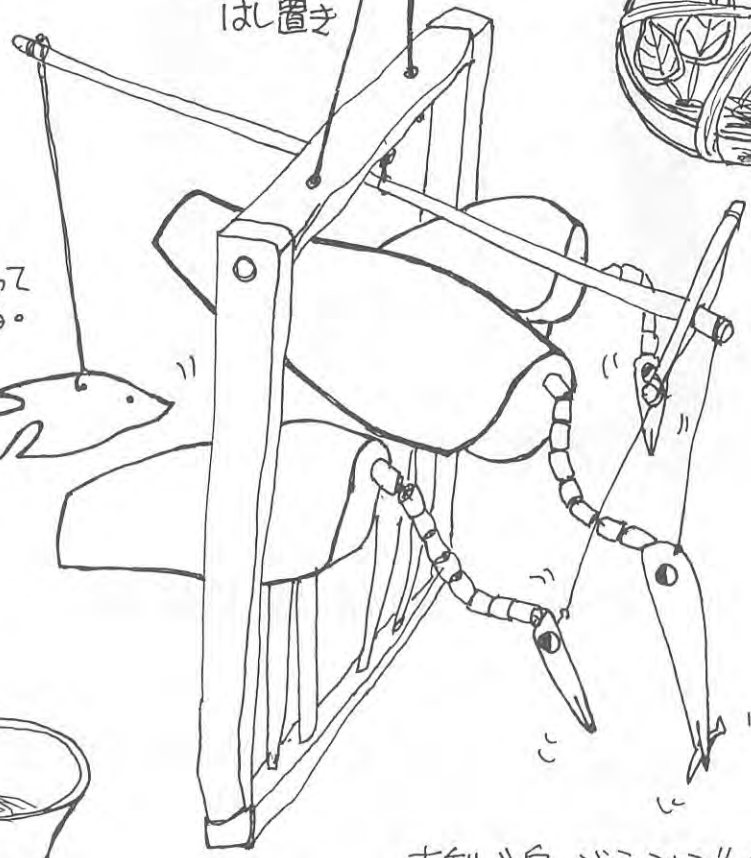


指の間と小さな穴から煙が出てきます…。

象の絵の青いネクタイ（シルク100%）

木製"魚型"はし置き

『タイガーベーム』陶器に入っている…。



このおもりでバランスをとっている。

木製"鳥ぶらぶら"（ゆらゆらかな…）

木製 小鉢

あとがき

◆アンコール時代の人々は『水』をとても大切にしていたという印象をいたる所で感じました…。

◆我々がカンボジアを訪れる9ヶ月前に行って来た方々が入れた遺跡がすでに立入禁止になっている現状を目のあたりにして、「いつまでもあたりまえ」と思って日常性の闇に埋もれて生活している自分がいることに気づかされました。

◆今回カンボジアを訪れることが出来たのも、いろいろな縁が成就してのことだと思う。本当に「おかげさん」です。

釋義祐

『おかげさん・別冊 / 柬埔寨見聞録（カンボジア けんぶんろく）』

発行日　2009.8.19
発　行　真宗大谷派 高徳寺
編　集　副住職　新井義雄

〒164-0002
東京都中野区上高田1-2-9
TEL. 03-3368-6947
FAX. 03-3362-8019